

職業行動に関する心理学的研究

— ホランド理論と選択にかかわる要因分析 —

A Psychological Study of Vocational Behavior

Testing Holland's Theory and Analyzing the Factors on Vocational Choices

森 下 高 治

I 問 題

個人の職業選択に関係する要因について、特に内的・心理的要因を問題にしたこれまでの研究においては、職業興味、知能、適性能力、価値観、欲求や性格特性など、あるいはまた、自己が抱く職業イメージといった各変数が取り扱われてきた。このうち、興味の研究は古くから取り組まれ、ストロング(1943)、クーダー(1946, 1966)などが多くの職業グループに独自の興味パターンが存在するを見い出しており、この考え方は今日では定説化している。

また、職業と知能の関係は職業によって高い知能が要求されるが、同時に全ての職業における知能の分布は、広範囲で許容性のあることが確認されている。知的能力の研究につづいて、労働省編一般職業適性検査(GATB)を用いた適性能力の研究からは職業別判断規準がまず設定され、それにもとづく職業適性類型が今日得られている。

さらに、スーパー(1969)は、WVIと称する職業価値のインベントリーを開発し、職業とのかかわりを検討している。

一方、個人が住む環境(家庭、学校、地域の直接的環境)、さらには文化とその環境を支える社会経済的基盤も職業選択の問題に深くかかわっている。このような外的・環境的要因に焦点をあてた研究は、心理学より、むしろ社会学の分野で扱われてきた。例えば、親の職業を基盤とする社会階層の問題、また父親の所得額や家族の総所得額も同様である。さらに、雇用機会の種類と量なども経済学的な環境変数であり、内的要因に比しかなりマクロ的な視点からの考察が必要である。

外的環境は、上述の通り極めて広範囲であるが、社会階層を支えているものが経済的環境変数であることから、結局のところ、親の職業と家庭の経済的状況などの社会階層面の問題と対人関係の2点に絞られる。

そのうち、対人関係の問題は、最も身近な家庭環境を第1に取り上げることが適切であると考えられる。その理由として、家庭環境は言うまでもなく、個人が幼児期に示すありとあらゆる

る反応を決定する場であり、また、児童期から青年期に至る間に個人の行動を制御しつづける場と考えられるからである。当然、家庭の場をとらえると、両親や兄弟などの家族の影響が考えられる。

そこで、親の態度が子どもの職業選択にどれほどの影響を与えるかをみようとしたものに、有名なロー(1957)の研究がある。ローは、一方では親の関心を軸に、過保護とか愛情を与えないことを問題にしている。また他方では、子どもに対する受容的な態度を取り上げ、これが後の職業選択と結びついていると結論づけている。

一般的な親の子どもに対する態度は、小嶋氏(1975)などが、シェイファー(1965)が作成した調査票で因子分析的研究を行っている、氏は、「受容対拒否」、「心理的自律対心理的統制」、「厳しい統制対甘い統制」の3因子を求めている。また、辻岡氏ら(1975)も同じ調査票を用い、「情緒的支持」、「同一化」、「統制」、「自律性」の4因子を子どもの側の認知的側面として見出ししている。

さらに、三浦氏ら(1970, 1971)も、「過保護・干渉的態度」、「許容・寛容的態度」、「感情的態度」、「民主的態度」の4因子を抽出し、これをYG性格検査と関連させている。

本研究では、これらの研究成果を参考に、「統制」と「受容」、また、「子どもへの期待」の3側面からみた子どもによる親の養育態度を問題として取り上げた。

次に、職業選択における家族の影響を扱った研究として、クライツ(1962)による子どもによる親への同一視を問題にした論文がある。氏は、その中で両親との同一視が職業興味パターンの形成に影響を与えるとの結論を得ている。この研究は、外的要因が内的要因に影響を与えるという点で注目される。

さらに、ジャンソンら(1955)の子どもが親の職業を継承する程度を問題にした研究がある。

註1)

息子が父親の職業を継承する割合は、アンドリュース(1945)によると6.8%、また、クライツ(1969)がこの種の論文をまとめた報告でも12~13%程度であり、率としては決して高くない結果を示している。しかし、ウエルツ(1968)のように専門的職業をあげた報告では、高い継承率を示しているものもある。

継承性については、全般的には、積極的な関係はみられないが、父親の職業はさまざまなかたちで息子の職業選択に影響をもつ。特に、親の問題をとらえるときに役割の視点から次の点が考えられる。

- 1 子どもは同一視によって同性の親の職業を受け入れる。
- 2 反対に息子は、異性の、例えば、母親の関心によってある職業を選ぶ。
- 3 また、親によって満たされなかったものを子どもは志望選択する。

註1) Weinstein, M.S. 1953 Personality and vocational choice
P. 12

4 3 とは逆のケースで、親が望む職業と反対の職業を志望選択する。

わが国では、小川氏ら(1979, 1980)が、親の職業が息子、娘の職業選択にいかに関与を及ぼすかという職業継承性に焦点をあてた研究を行っている。

いずれの研究からも、親の職業を考える場合に、対人関係の枠組みにおける親への同一視、また、親子関係、さらに親の子どもに対する職業的期待などが重要な変数として考えられる。

以上、主として外的・環境的要因を中心にした幾つかの論文をあげたが、職業選択にかかわる要因については、ただ単一の変数からの、或いは、内的要因同士の複数の変数からの職業選択行動への接近だけでは不十分であることは言うまでもない。しかも森下が一連の論文(1980 a, b 1981 a, b)で指摘しているように、心理学的側面の特性要因理論といった一視点からの接近については限界がある。従って、プロウら(1956)の個人の好みだけで職業に就くことは決してないとする指摘や、クライツの親またはそれにかかわる人との同一視の問題の提起、あるいはまた、発達理論からの文化的、社会的影響とサイコダイナミックな問題などから、選択に影響をもつであろうとする多くの要因を総合的にとらえる必要が生じてくる。

既に、心理学的、非心理学的理論の枠を越えたホランド理論については、上記の森下の論文で詳細に述べているが、先ず本研究の前半では、ホランドが掲げる6つのパーソナリティタイプの存在について、その理論の再吟味からこの問題を明らかにする。つづいて後半では、これまで取り扱われていない6領域にみられる内的・外的要因の問題を明らかにする。

II 方 法

調査方法)職業選択にかかわる要因分析を進めるにあたって、以下のような手続きで調査票を作成した。

まず、内的要因の変数及び外的要因の変数について、今日までに集積された研究成果をもとに、電子計算機による数量化処理の制約を考慮に入れて15変数、各3~4のカテゴリーをめぐりに調査項目を選び出し、これを職業選択要因調査票とした。

1. 内的要因の変数

スーバー(1969)が掲げた主体的条件としての諸変数のうち、能力は、適性能力-aptitudes-を労働省編一般職業適性検査改訂版から7つ選び出した。また、パーソナリティの側面は、性格特性-traits-を8特性で捉え、興味-interests-は8つの活動分野に分類したものを取り上げた。

さらに、価値観-values-は、マスロー(1954)の欲求構造に対応したかたちで4つの価値に大分類し、Tab.1の通り17の内的・心理的変数とした。

2. 外的要因の変数

個人が誕生から乳児期、幼児期、児童期を経て青年期への発達過程のなかで、影響を与える外的・環境的要因は、当然、変動していくものと考えられる。

調査票では、多くの外的環境のなかで個人とのかかわりあいに深い意味をもつ家庭、学校という場を考慮し、両親、兄弟、友人、先生などの対人影響の要因、また、本人が過した家庭の「子どもからみた親の養育態度」の側面、さらに、社会階層を規定する社会経済的環境をも変数の対象として、Tab.2の通り計15の外的要因変数を設定した。

これ以外に、個人的属性として、出生順位や本人の進路選択の決定時期を尋ねた。調査は、職業選択要因調査票とSDSを用い、1981年6月に実施した。

所要時間は約60分間要し、実施は、森下が直接出向き(一部、講義担当者に委ねた)、講義時間内に集団一斉方式で記入を求めた。

調査対象)Tab.3に示す通り、職業選択要因調査対象者は、^{註2)}大学生男子337名である。学年別内訳は、1年生166名、2年生23名、3年生88名、4年生60名である。またSDS調査対象者は417名である。学年別内訳は、1年生188名、2年生22名、3年生120名、4年生87名である。

註2) 職業選択要因調査対象者は、両親が健在であるもの、志望職業名が記入されているもの。また、現在の専攻が総合的に満足、あるいはまあまあであるとするもの及び記入もれがないもののこれら4条件を満たしているものに限った。

特に、両親とも健在であるものを選んだ理由は、対人影響要因として、父親及び母親の影響力をみるためである。

対象校は、5校であるが、内訳は兵庫県下私立A大学理学部、法学部、商学部、大阪府下私立B大学経済学部、経営学部、私立C大学文学部、経済学部、私立D大学工学部、そして京都府下の公立E大学美術学部である。

なお、問題Iの分析には、1978年～1979年に実施した大学生男子SDS対象者1315名を対象として加えた。本研究での統計的処理は、関西学院大学情報処理研究センターFACOM 230-38による。

Table 1

内的要因の変数とカテゴリ

<p>性格特性</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 実 際 的 2. 熟 慮 的 3. 神 經 質 4. 活 動 的 5. 支 配 的 6. 社 会 的 外 向 7. 秩 序 的 8. 直 観 的 	<p>活動分野への関心</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 機 械 的・技 術 的 2. 戸 外 3. 知 的・研 究 的 4. 芸 術 的 5. 対 人 接 触 的 6. 奉 仕 的 7. 管 理・監 督 的 8. 事 務 的・計 算 的
<p>適 性 能 力</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 言 語 能 力 2. 数 理 能 力 3. 書 記 的 知 覚 4. 空 間 判 断 力 5. 形 態 知 覚 6. 運 動 共 応 7. 腕・指先の器用さ 	<p>価 値 観</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 安 定 2. 対 人 接 触 3. 地 位 4. 自 己 実 現

性格特性と適性能力は、3件法で回答を求めた。また、活動分野への関心と価値観はいずれも該当するもの一つだけ選ばせた。そのうち、価値観は10の項目を上記の通り4つに分類した。

Table 2
外的要因と個人的属性の変数とカテゴリー

親の職業 レベル-父親	1. 専門的(高級)	親の養育態度	5. 先 生
	2. 専門的(定型的)		1. 父親の統制的態度
領域-父親	3. 事務的	経済的状況	2. 母親の "
	4. 熟練的		3. 父親の受容的態度
	5. 半熟練的		4. 母親の "
	1. 現実的		男らしさへの期待
	2. 研究的		5. 父 親
	3. 芸術的		6. 母 親
母親の就労状況	4. 社会的	出生順位	1. 下宿通学可能
	5. 企業的		2. 自宅通学可能
	6. 慣習的		3. 自宅通学困難
対人影響	1. 有職者	進路の決定時期	1. 長 男
	2. 就労経験者		2. 非長男
	3. 未経験のもの	1. 中学校及び以前	2. 高校時代
	1. 父 親		3. 大学入学以後
2. 母 親			
3. 友 人			
4. その他の人			

対人影響の4.その他の人は兄弟姉妹、叔父、叔母、知人などを含む。

Table 3
男子大学生調査対象者内訳

専攻学部	職業選択要因調査 分析対象者	S D S 分析対象者
文 学 部	14	29
経 済 学 部	62	64
経 営 学 部	82	121
法 学 部	4	3
商 学 部	1	1
理 学 部	43	42
工 学 部	99	124
美 術 学 部	32	33
計	337	417

Ⅲ 結果と考察

問題Ⅰ ホランド理論の再吟味

ホランドは、1973年にこれまでの研究成果を集積したものとして、*making vocational choices* という書物を表している。氏は、その著で、1、多くの人びとは、現実的、研究的、芸術的、社会的、企業的、慣習的の6つのタイプのいずれかにあてはめることができると述べ、2、また、人が生活している環境は、同じく現実的、研究的、芸術的、社会的、企業的、慣習的の6つの環境モデルに特徴づけることができるとしている。森下もこれまでの一連の研究で、わが国の在学生、在職者にこれをあてはめ、特定のパーソナリティタイプに対応する特定の環境（専攻学部、職業）が存在することを認めている。

上記の仮説以外に、ホランドは個人のパーソナリティタイプや職業環境は、いずれにおいても、ある種のタイプとタイプとの間には他のタイプよりも関連性が強いことを指摘している。具体例として、現実的（R）、研究的（I）、芸術的（A）、社会的（S）、企業的（E）、慣習的（C）の順序からすると、隣接している現実的と研究的な組み合わせのタイプは、芸術的と企業的よりも頻繁にみられる。しかも、6つの領域間の類似度を図式化し、1969年には六角形からなるモデルを提唱している。しかし、6領域そのものについて、それが果たして妥当であるか。また、6領域内の内部関連性についても、その理論を再吟味する上で極めて重要な課題であると考えられる。

もともと典型的な接近は、性格に関する研究以外に、価値観の研究や職業に関する興味の側面の研究が先行していた。職業興味は、ストロングが組織的に手がけて以来、クーダー（1946）、ギルフォード（1954）、ロー（1956）、さらにスーパー（1957）と相次いで研究がなされている。

特に、ギルフォードは因子分析による研究から機械的、科学的、美的、社会福祉的、商業的、書記的の6つの主要な興味を見い出している。ローやスーパーも7ないし8つの興味・活動分野をあげている。

スーパーは、技術的・物質的、科学的、文学的、芸術的、社会福祉的、折衝的、実務細目的の7つの興味を問題にしている。また、わが国の労働省の雇用職業研究所が開発した職業レディネス・テストでは、機械・技術、研究・管理、自然・医療、対人・社会、社会・芸術、事務対人・サービス、手工・技能の8つの職業クラスター（領域）を取り上げている。このように興味は、テストや理論面からも多くのものがカテゴリーとして考えられているが、幾つかの因子分析による興味の要因を比較したスーパーとクライツ（1962）の研究は、科学的、社会的、言語-文学的、機械的、折衝的、芸術的の6要因を共通なものとして見い出している。

また、コールら（1971）は、この点に注目して、ストロングのSVIB、クーダーのOIS、ホランドのVPI、ミネソタグループのMVII、American College Test Program（ACT）のVIPのテストを用い、各尺度の内部構造の関係を比較した。結果は、各テストともホランドがいう6領域にほぼわかれ、内部構造に類似性のあることが認めら

れた。これから、職業興味を問題とする場合、究極的には、それは幾つかの群にまとめることができるものと考えられる。

そこで、本研究は6領域そのものの設定が果して可能であるかどうか、まずこの点を明らかにする。具体的には、SDSの職業興味尺度を用いて、職業興味に当該職業を含む6つの群にうまくまとまりがあるかをみようとする。つづいて、職業興味尺度も含めたSDS全尺度(下位尺度と総合結果)の内部構造と座標上の位置を検討する。

SDS内部の関連性について、既に森下は下位尺度の各領域がうまく対応していることを、因子分析による調査票の妥当性を検討した研究で明らかにしている。^{註3)}

まず、最初の課題である職業興味の職業のとりあげ方は、電子計算機による数量化処理の制約を考慮し、予め設定されている領域ごとに代表的な職業を5つ選び出して、計30項目に絞り分析を進めた。職業興味間、また、SDS全尺度の6領域間の関連性を明らかにするためにガットマン、リンゴー(1965, 1968)が開発したSmallest Space Analysis - SSA^{註4)}を用い、グラフ化したところ、Fig.1のようになった。逸脱係数(coefficient of alienation)は2次元で0.2105を示す。

対象は、1978年1月から1979年7月にかけておこなった文学部、経済学部、法学部、経営学部、理学部、工学部、農学部、医学部、芸術系学部、教育学部の男子学生各40名、計400名の結果である。

図から、2次元にプロットされた各職業について見ると、電気・水道・ガス工事業者、電気工、電車運転士、測量技師、無線電信技術者が比較的まとまりをみせており、これらは全て現実的領域の職業に入る。また、化学者、医師、生物学者、植物学者、人類学者もまとまりをもっている。特に、人類学者は音楽的職業と近い関係にあるが、5つの職業はやや幅が広いが研究的職業として捉えることができる。さらに、脚本家、作家、詩人、作曲家、ピアニスト・バイオリニストは芸術的職業としてまとまりがある。

对人的接触の要素が多い社会科教員、高校教員、青少年補導員、養護施設職員、カウンセラーも各職業相互間の距離は近く、社会的職業として捉えることができる。

この他に、不動産営業セールスマン、旅行会社営業係、証券会社セールスマン、会社経営者、工場長あるいは支店長は、営業と管理的な要素を含む職業としてまとまりがある。このうち工

註3) SDSの妥当性 拙稿1981aを参照。

註4) 本プログラムはガットマン教授のご厚意により、関西学院大学社会学部教授 真編一史先生が入手されたものを使わせていただいた。ここに両先生のご好意に対して衷心より感謝の意を表します。

具体的なSSAの手法は、 n 個の対象(変数)をその相互間の距離 D_{ij} —特に順位に着目して、これをできるだけ小さい次元の空間に n 個の点としてプロットすることにより対象相互間の類似性や親近性の構造をみようとする方法である。

ガットマンとシュレジンガー(1969)は、フューガー(1964)の知能および学力に関する因子分析結果にSSAを適用し再分析している。

その結果、この方法は因子分析法に比較してより少ない次元で記述が可能であり、空間構造の位置関係を明確に求めることができる。

場長あるいは支店長だけが、経理事務係などの職業とも近い関係にあることが見られる。しかし、5つの職業を全体的にみると企業の職業として考えられる。また、経理事務係、銀行出納係、在庫品管理係、売上げ勘定係、給与支払事務係の5つの職業は、事務的色彩の強い職業としてまとまりをみせており、慣習的職業に含まれる。

全体的には、企業の領域と慣習的領域の両職業群は、他の4領域の職業群より近い位置にある。

Tab. 4は、30の職業間の相関係数を示す。変数間の相関値が高ければ、図に示されるように両者間の距離は近い位置にある。

以上から、職業興味の構造は6領域でおさまることが明らかになった。また、全体的な領域間の関係を捉えると、R-I-A-S-E-C-Rの順に循環しており、ホランドが示す六角形モデルが本分析で検証できた。また、6領域間の座標上の位置（位置関係）は、現実的と社会的は明確に全く反対の位置にある。同様に、研究的と企業的、芸術的と慣習的もほぼ反対の位置にあることが図からあらためて明らかにされた。

結論的には、6領域そのものの設定は、職業興味の構造からほぼ満足のいく結果が得られた。しかし、各領域間の距離は等間隔でないことや領域によって幅の広い領域も存在することが明らかになったことから、6領域間の位置関係はやや変形した六角形を示すものと考えられる。

Fig. 1

職業興味に関する30の職業間の位置関係(大学生男子 N=400)

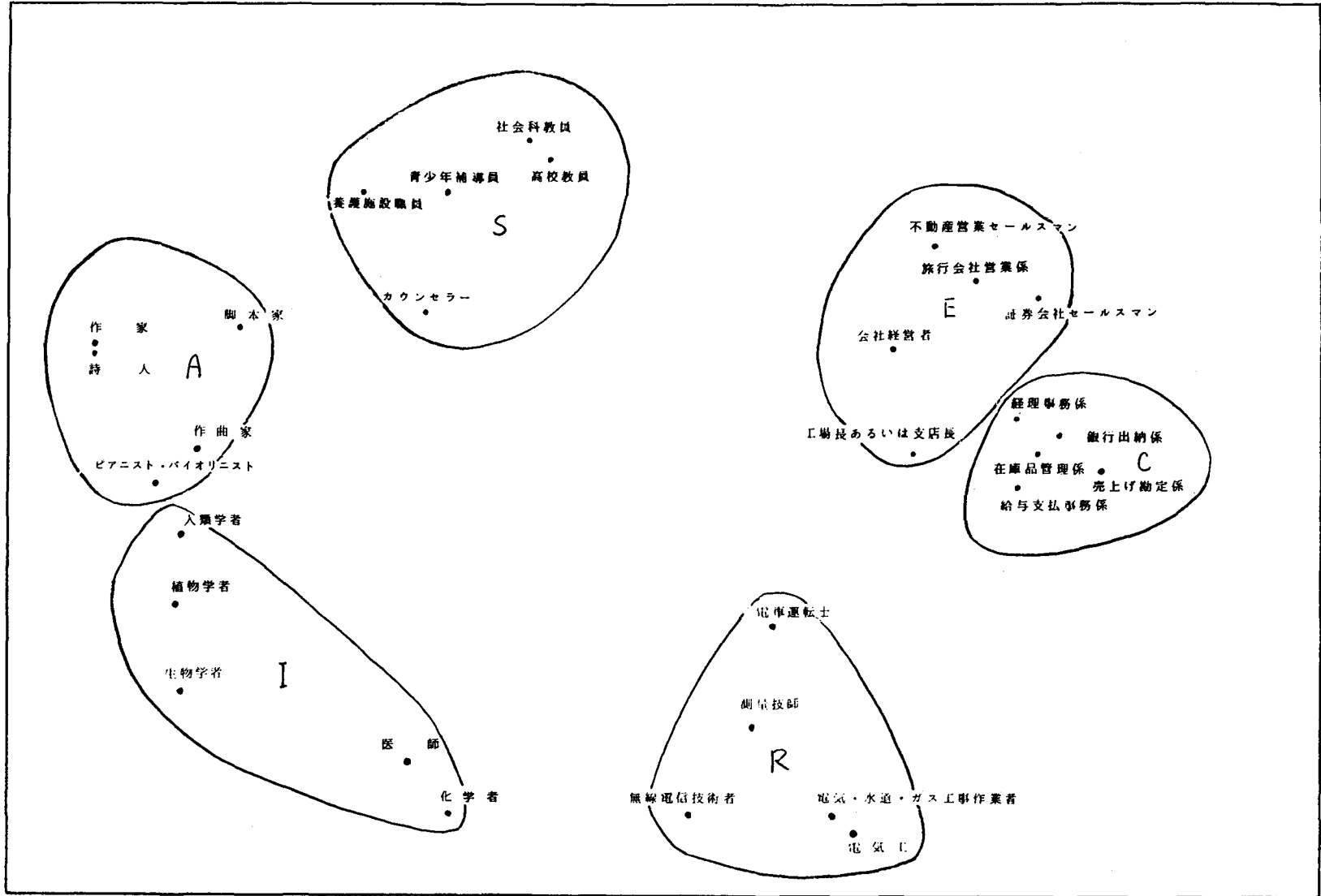


Table 4

職業興味に関する各職業間の相関関係 (大学生男子 N=400)

COLUMN =	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	
電気・水道・ ガス工事業者	1	0.0																	
測量技師	2	0.33	0.0																
無線電信技術者	3	0.39	0.44	0.0															
電車運転士	4	0.21	0.15	0.21	0.0														
電気工	5	0.54	0.33	0.46	0.25	0.0													
生物学者	6	0.03	0.04	0.04	0.18	0.01	0.0												
人類学者	7	0.03	0.09	0.01	0.05	0.02	0.35	0.0											
化学者	8	0.11	0.18	0.19	0.16	0.15	0.40	0.19	0.0										
医師	9	0.03	0.08	0.16	0.02	0.11	0.15	0.18	0.23	0.0									
植物学者	10	0.06	0.11	0.06	0.11	-0.00	0.62	0.31	0.27	0.10	0.0								
詩人	11	-0.01	0.03	0.04	-0.02	-0.11	0.10	0.23	0.04	0.03	0.19	0.0							
ピアニスト・ バイオリニスト	12	-0.06	-0.03	0.05	0.08	-0.01	0.20	0.18	0.05	0.11	0.19	0.29	0.0						
作家	13	-0.06	0.03	0.01	-0.01	-0.09	0.12	0.27	0.03	0.02	0.13	0.49	0.27	0.0					
作曲家	14	-0.01	0.03	0.13	0.09	0.01	0.12	0.18	-0.00	0.10	0.17	0.31	0.63	0.32	0.0				
脚本家	15	0.02	0.03	0.05	-0.02	-0.04	0.07	0.21	-0.02	0.05	0.15	0.30	0.21	0.41	0.31	0.0			
高校教員	16	0.07	0.11	0.06	0.11	0.05	0.04	0.07	0.12	0.07	0.04	0.05	-0.00	-0.05	-0.00	0.04	0.0		
青少年指導員	17	0.07	0.05	0.04	0.08	-0.00	0.08	0.11	0.08	0.11	0.07	0.09	0.05	0.06	0.04	0.10	0.34	0.0	
養護施設職員	18	-0.01	0.01	-0.03	0.07	-0.04	0.09	0.18	0.03	-0.02	0.18	0.19	0.09	0.14	0.13	0.10	0.30	0.56	0.0

COLUMN =		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18
社会科教員	19	-0.02	-0.02	-0.10	0.10	-0.11	0.02	0.10	-0.03	-0.07	0.11	0.14	0.04	0.16	0.09	0.17	0.37	0.27	0.26
カウンセラー	20	0.05	0.09	0.06	0.10	0.03	0.14	0.19	0.10	0.14	0.14	0.22	0.13	0.22	0.08	0.15	0.30	0.57	0.45
証券会社 セールスマン	21	0.04	0.16	0.02	0.00	0.05	-0.05	0.01	-0.00	0.07	-0.05	-0.09	-0.02	-0.04	0.02	0.04	0.03	-0.02	-0.06
工場長 あるいは支店長	22	0.10	0.18	0.15	0.17	0.13	-0.12	0.02	0.04	0.12	-0.03	-0.08	-0.00	-0.02	0.03	0.13	0.07	0.04	-0.00
会社経営者	23	0.07	0.18	0.10	0.04	0.03	-0.08	0.03	0.04	0.14	-0.07	-0.09	0.04	0.03	0.06	0.12	0.00	0.05	-0.00
旅行会社営業係	24	0.07	0.13	0.04	0.23	0.06	-0.05	-0.08	-0.03	-0.02	-0.01	-0.13	-0.03	-0.12	-0.06	0.01	0.11	0.10	0.11
不動産営業 セールスマン	25	0.06	0.10	-0.05	0.08	0.02	-0.01	0.04	-0.01	0.08	0.02	-0.08	-0.01	-0.05	-0.04	0.07	0.08	0.06	0.04
売上げ勘定係	26	0.08	0.07	0.02	0.15	0.09	-0.03	-0.13	0.03	-0.08	-0.06	-0.04	0.07	-0.09	0.01	-0.04	0.08	-0.00	0.04
銀行出納係	27	0.11	0.04	0.06	0.15	0.07	-0.04	-0.08	0.02	0.01	-0.05	-0.06	-0.01	-0.08	0.01	0.07	0.00	0.05	0.07
在庫品管理係	28	0.13	0.06	0.08	0.19	0.12	-0.05	-0.03	-0.01	-0.10	-0.01	-0.06	0.02	-0.11	0.07	-0.01	0.02	0.06	0.07
経理事務係	29	0.03	0.05	0.06	0.11	0.09	-0.06	-0.02	-0.01	0.03	-0.04	-0.05	0.06	-0.04	0.08	0.02	-0.01	0.03	0.01
給与支払事務係	30	0.04	0.11	0.10	0.23	0.07	-0.07	-0.06	0.05	0.04	-0.09	-0.04	0.05	-0.04	0.02	0.04	-0.00	0.00	0.05

COLUMN =	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	
社会科教員	19	0.0											
カウンセラー	20	0.34	0.0										
証券会社 セールスマン	21	0.13	0.03	0.0									
工場長 あるいは支店長	22	0.14	0.08	0.29	0.0								
会社経営者	23	0.10	0.07	0.27	0.56	0.0							
旅行会社営業係	24	0.19	0.07	0.32	0.25	0.26	0.0						
不動産営業 セールスマン	25	0.15	0.12	0.50	0.27	0.24	0.29	0.0					
売上げ勘定係	26	0.07	0.03	0.18	0.13	0.06	0.17	0.11	0.0				
銀行出納係	27	0.00	0.05	0.20	0.26	0.18	0.22	0.24	0.48	0.0			
在庫品管理係	28	0.11	0.04	0.31	0.16	0.14	0.20	0.22	0.39	0.36	0.0		
経理事務係	29	0.11	0.11	0.19	0.23	0.19	0.20	0.11	0.47	0.38	0.40	0.0	
給与支払事務係	30	0.03	0.13	0.17	0.26	0.20	0.13	0.21	0.46	0.50	0.37	0.37	0.0

次に、もう一つの課題である SDS の下位尺度と総合結果について検討する。SDS 調査票は、各側面とも 6 領域からなり、総合も入れ合計^{註5)} 36 で構成されている。これら 36 の各領域の相互間の関連性と位置関係がどうであるかをみるため、職業興味^{註5)}の分析と同じようにガットマンらの Smallest Space Analysis を適用した。

対象は、これまでの分析対象者であった大学生 1315 名に、今回の対象者 417 名を加えた計 1732 名である。

Fig. 2 に結果を示す。逸脱係数 (coefficient of alienation) は 2 次元で 0.1634 である。また 36 の各領域間の相関係数は Tab. 5 に示す通りである。図から、現実的領域 (R) において能力の可能性 (能力)、職業興味、活動性、手腕の技術、機械に関する能力、総合結果などはまとまりがあることがわかる。研究的領域 (I) では能力の可能性 (能力)、職業興味、活動性、科学的能力、そしてこれらの総合結果などもまとまりをもつ。芸術的領域 (A) では芸術的な活動性、職業興味、能力の可能性、芸術的能力、音楽的能力、総合結果などはまとまりを見せている。社会的領域 (S) では、社会的な能力の可能性、職業興味、活動性、教えること^{註5)}の能力、人と協力して仕事をする能力 (協調的能力)、総合結果などが比較的まとまりがある。同様に、企業的領域 (E) では、企業的領域の活動性、能力の可能性、職業興味、人や仕事を管理する能力 (管理技術の能力)、営業販売の能力、これらの総合結果などがまとまっている。また、企業的領域と社会的領域の活動性及び能力の可能性は互いに近く位置しており、相互に関連性が強いことを示している。慣習的領域 (C) では、慣習的な能力の可能性、活動性、職業興味、文章を早く書く能力、事務能力、そして慣習的な総合結果などがまとまりを示している。

各領域において、能力の自己評価①及び②と総合結果は相互に近い位置にあり、残りの活動性、能力の可能性、職業興味などが相互に近い位置にあり、小さなまとまりを見せている。

なお、研究的領域の計算や応用問題を推理し解く能力 (数理的能力) だけが、孤立した座標位置にプロットされている。

しかし、全体的には 36 の各領域は、ほぼ現実的、研究的、芸術的などの各群にまとまりをみることができ、その上、ホランドが示しているように順序も R-I-A-S-E-C-R の順に循環していることが本分析から明らかになった。

以上から、内部構造の問題を座標上で表した職業興味^{註5)}の分析結果と本結果とを総合すると 6 領域からなるホランド理論は、十分支持できるものと考えられる。

註5) SDS は、活動性、能力の可能性 (能力)、職業興味、能力の自己評価①及び②の 5 つの下位尺度と総合結果からなる。各尺度は 6 領域で構成されているため下位尺度は 5 × 6 領域で 30、それに 6 領域からなる総合結果を加えると計 36 である。分析はいずれも粗点を用いた。

Fig. 2

SDS下位尺度及び総合結果についての位置関係 (大学生男子 N=1732)

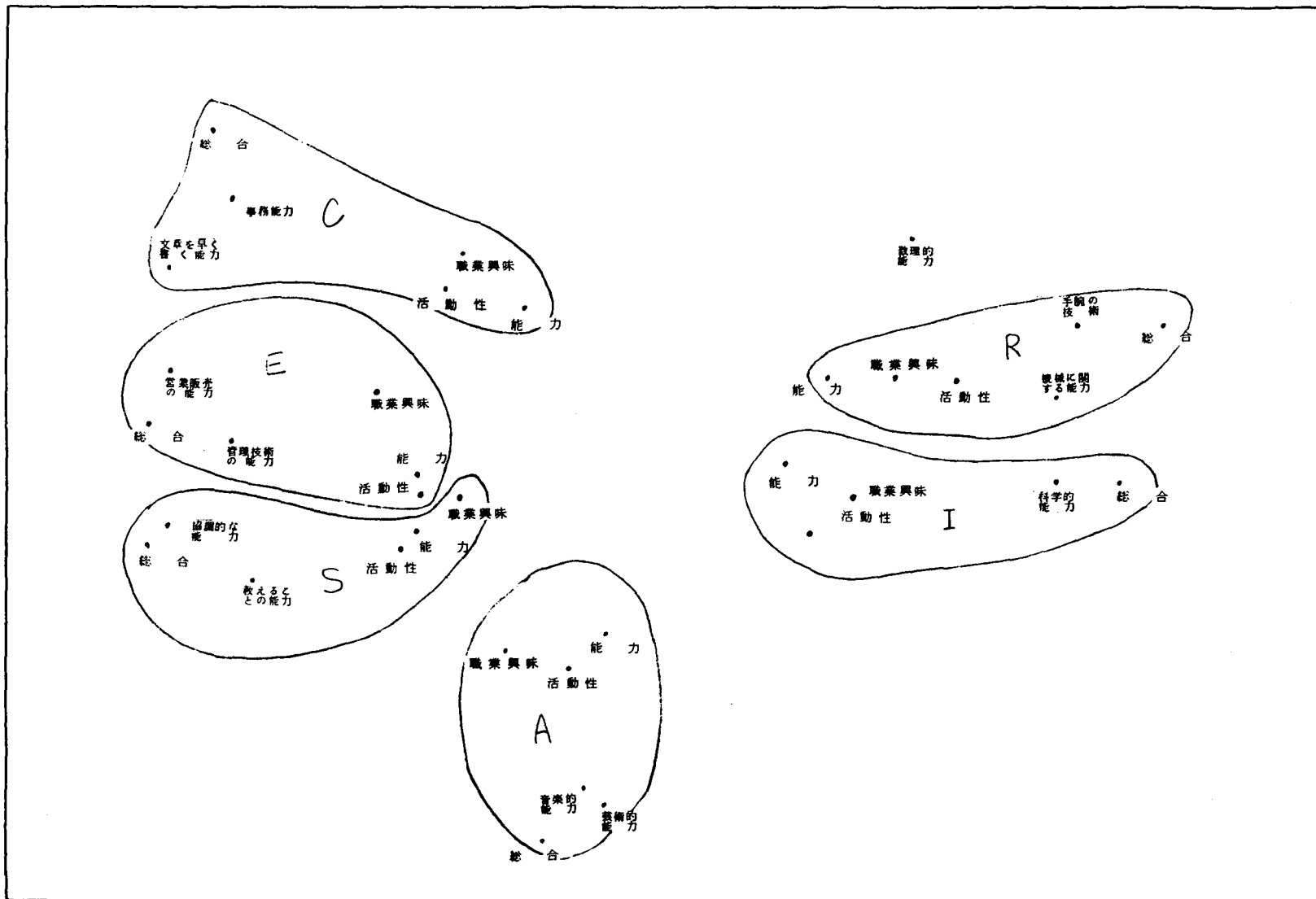


Table 5

SDSの内部相関結果について(大学生男子 N=1732)

COLUMN =	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	
活動性																			
現実的	1	0.0																	
研究的	2	0.27	0.0																
芸術的	3	0.07	0.25	0.0															
社会的	4	0.05	0.10	0.34	0.0														
企業的	5	-0.02	0.18	0.33	0.45	0.0													
慣習的	6	0.02	0.13	0.13	0.28	0.29	0.0												
職業興味																			
現実的	7	0.61	0.32	0.10	0.05	0.02	0.07	0.0											
研究的	8	0.23	0.67	0.27	0.11	0.17	0.10	0.44	0.0										
芸術的	9	-0.04	0.16	0.67	0.23	0.32	0.12	0.11	0.32	0.0									
社会的	10	-0.05	0.20	0.26	0.43	0.43	0.26	0.15	0.32	0.35	0.0								
企業的	11	0.02	-0.00	0.19	0.34	0.45	0.36	0.20	0.15	0.36	0.41	0.0							
慣習的	12	0.01	0.09	0.05	0.15	0.19	0.60	0.20	0.15	0.17	0.33	0.51	0.0						
能力																			
現実的	13	0.55	0.24	0.12	0.12	0.11	0.07	0.37	0.19	0.01	0.03	0.08	0.05	0.0					
研究的	14	0.23	0.54	0.17	0.12	0.20	0.10	0.24	0.49	0.11	0.16	0.05	0.08	0.46	0.0				
芸術的	15	0.11	0.15	0.58	0.29	0.26	0.11	0.08	0.23	0.48	0.21	0.19	0.04	0.28	0.32	0.0			
社会的	16	-0.01	0.11	0.31	0.59	0.57	0.27	0.01	0.15	0.28	0.49	0.36	0.17	0.18	0.23	0.43	0.0		
企業的	17	0.02	0.09	0.27	0.44	0.65	0.27	-0.00	0.11	0.28	0.35	0.46	0.19	0.23	0.25	0.39	0.70	0.0	
慣習的	18	0.07	0.15	0.14	0.22	0.26	0.56	0.08	0.11	0.12	0.19	0.29	0.41	0.28	0.29	0.27	0.35	0.35	0.0

COLUMN =	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	
自己評価① 学問に關する能力	19	0.63	0.16	-0.19	-0.13	-0.17	-0.17	0.45	0.10	-0.24	-0.18	-0.13	-0.08	0.54	0.20	-0.07	-0.16	-0.12	-0.04
科學的 能力	20	0.25	0.53	-0.08	-0.11	-0.06	-0.13	0.23	0.40	-0.12	-0.08	-0.22	-0.11	0.27	0.47	-0.06	-0.08	-0.06	-0.01
藝術的 能力	21	-0.08	-0.04	0.50	0.01	0.04	-0.10	-0.05	0.04	0.40	-0.01	-0.03	-0.13	-0.03	-0.03	0.44	0.09	0.04	-0.04
學問と その能力	22	-0.24	-0.00	0.08	0.33	0.31	0.10	-0.21	-0.02	0.09	0.35	0.13	0.03	-0.08	0.00	0.08	0.41	0.33	0.07
芸術的 能力	23	-0.16	-0.23	-0.04	0.18	0.27	0.19	-0.14	-0.21	0.02	0.09	0.42	0.18	-0.14	-0.19	-0.04	0.19	0.34	0.11
文學を學ぶ 能力	24	-0.34	-0.17	0.04	0.07	0.07	0.31	-0.26	-0.14	0.10	0.07	0.10	0.19	-0.24	-0.12	0.04	0.07	0.06	0.25
自己評価② 手続の 能力	25	0.49	0.18	-0.02	-0.11	-0.11	-0.20	0.34	0.11	-0.09	-0.16	-0.17	-0.19	0.44	0.20	0.05	-0.11	-0.06	-0.07
目的 能力	26	0.15	0.38	-0.12	-0.07	-0.07	-0.00	0.10	0.21	-0.10	-0.05	-0.16	-0.00	0.17	0.26	-0.08	-0.06	-0.01	0.07
音楽的 能力	27	-0.09	-0.07	0.40	0.04	-0.03	-0.10	-0.06	0.01	0.33	0.00	-0.04	-0.09	-0.06	-0.04	0.39	0.05	-0.01	-0.10
協同的 能力	28	-0.14	-0.13	0.00	0.33	0.19	0.09	-0.10	-0.08	-0.00	0.17	0.25	0.08	-0.09	-0.05	0.02	0.30	0.19	0.06
管理技術 能力	29	-0.12	-0.09	0.01	0.22	0.45	0.13	-0.11	-0.07	0.03	0.21	0.33	0.09	0.00	0.01	0.02	0.37	0.49	0.13
事務能力	30	-0.29	-0.16	-0.10	0.03	0.03	0.40	-0.18	-0.12	-0.02	0.08	0.20	0.35	-0.21	-0.13	-0.11	0.02	0.03	0.38
総合 現実的	31	0.69	0.04	-0.24	-0.27	-0.33	-0.26	0.52	-0.00	-0.31	-0.32	-0.26	-0.19	0.53	0.06	-0.15	-0.33	-0.29	-0.17
研究的	32	0.15	0.64	-0.15	-0.25	-0.20	-0.16	0.17	0.53	-0.16	-0.13	-0.34	-0.15	0.12	0.53	-0.13	-0.23	-0.24	-0.09
藝術的	33	-0.18	-0.10	0.65	-0.03	-0.03	-0.15	-0.15	-0.01	0.59	-0.04	-0.05	-0.16	-0.15	-0.11	0.55	0.01	-0.04	-0.12
社会的	34	-0.35	-0.21	-0.02	0.51	0.28	0.09	-0.28	-0.17	-0.00	0.49	0.17	0.03	-0.25	-0.18	-0.02	0.54	0.27	0.01
企業的	35	-0.25	-0.28	-0.06	0.18	0.55	0.14	-0.23	-0.22	0.04	0.15	0.54	0.12	-0.15	-0.17	-0.04	0.32	0.57	0.10
慣習的	36	-0.31	-0.24	-0.21	-0.10	-0.11	0.53	-0.22	-0.23	-0.11	-0.03	0.11	0.49	-0.27	-0.23	-0.21	-0.13	-0.11	0.42

COLUMN =	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	
自己評価① 機械に關する能力	19	0.0																	
科學的 能力	20	0.41	0.0																
藝術的 能力	21	-0.22	-0.17	0.0															
他人と との能力	22	-0.32	-0.15	-0.06	0.0														
想像力 の能力	23	-0.25	-0.40	-0.14	0.10	0.0													
文字を早く 書く能力	24	-0.46	-0.38	-0.02	0.08	0.09	0.0												
自己評価② 手前の技術	25	0.61	0.31	0.03	-0.21	-0.21	-0.33	0.0											
論理的 能力	26	0.25	0.53	-0.16	0.01	-0.20	-0.17	0.17	0.0										
音楽的 能力	27	-0.11	-0.08	0.46	-0.02	-0.08	-0.01	-0.13	-0.17	0.0									
協調的 能力	28	-0.18	-0.24	-0.01	0.24	0.27	0.15	-0.31	-0.30	-0.10	0.0								
管理技術 の能力	29	-0.18	-0.16	-0.05	0.33	0.38	0.16	-0.22	-0.22	-0.19	0.30	0.0							
事務能力	30	-0.33	-0.26	-0.09	0.12	0.24	0.45	-0.38	-0.20	-0.21	0.09	0.10	0.0						
總 合 現 実 的	31	0.81	0.29	-0.15	-0.41	-0.28	-0.44	0.70	0.16	-0.14	-0.29	-0.30	-0.39	0.0					
研究的	32	0.28	0.75	-0.19	-0.18	-0.41	-0.29	0.22	0.60	-0.15	-0.30	-0.30	-0.25	0.23	0.0				
芸術的	33	-0.30	-0.23	0.72	-0.08	-0.14	0.04	-0.11	-0.24	0.66	-0.11	-0.18	-0.15	-0.24	-0.21	0.0			
社会的	34	-0.40	-0.34	-0.10	0.62	0.22	0.14	-0.41	-0.24	-0.08	0.59	0.31	0.13	-0.48	-0.36	-0.11	0.0		
企業的	35	-0.30	-0.35	-0.12	0.22	0.65	0.14	-0.30	-0.25	-0.14	0.26	0.64	0.17	-0.37	-0.41	-0.13	0.34	0.0	
慣習的	36	-0.34	-0.34	-0.18	-0.03	0.15	0.56	-0.38	-0.13	-0.17	0.03	-0.00	0.67	-0.31	-0.21	-0.13	0.06	0.14	0.0

問題Ⅱ 6 領域における内的要因、外的要因の特徴

現実的から慣習的の各パーソナリティタイプは、個人と彼をとりまく環境との相互作用のなかで形成される。

ホランドは、これまでに内的要因を中心としたパーソナリティタイプの特徴をまとめており、これを森下(1981b)が詳細に取り上げている。しかし、上述のように個人と環境との相互作用の問題を考えると、外的要因の側面も重要な変数として取り扱う必要がある。

本分析では、この点に注目して内的要因はもちろんのこと、外的要因をも含めた各タイプの特徴が果して見いだされるかどうかを試みるものである。手続きは、SDS調査票によって得られた総合コードの第1位^{註6)}にある領域を、各人毎に領域別に取り出し、各領域に含まれる人たちがどのような特徴をもっているかを検討する。

Tab. 6-a, b は、6 領域間の分散分析結果である。表から外的要因としての対人影響では、母親と先生の要因が6 領域間で有意な差異が認められた。次に、各領域間の違いをライオン基準のもとで検討すると、母親の要因については、慣習的タイプがこの影響をうけており、研究的、現実的タイプと明確な差異がみられる。

社会的タイプも、研究的、現実的タイプと差異があり、また、芸術的タイプも同様な差異がみられることから、特に、研究的、現実的タイプは、母親から影響を受けていないという特徴を示している。

また、先生の要因は、社会的タイプが芸術的タイプを除く他領域との間に、それぞれ差異が認められ、強い影響を受けているといえる。対人影響の各要因は、全体的には父親の要因の影響が大であり、次に先生、母親、その他の人がつづいている。

親の養育態度は、各態度とも、5%以上の差異は認められなかった。しかし、父親による受容的態度は10%水準で、社会的タイプが最も積極的な態度をとるのに対して、慣習的タイプは弱いといえる。全般的には、父親より母親の方が積極的で、企業的、社会的タイプは他より大である。

父親による統制的態度は、6 領域間に差異が殆んどなく、数値的には母親の方が統制的態度は強い。また、父親による男らしさへの期待は、企業的タイプでは強いが、研究的、現実的タイプでは弱い。母親による期待は、父親より全般にやや弱く、6 領域では企業的タイプに期待が強い。

次に、親の職業などの社会階層面の問題を Tab. 7 からみる。職業レベルについて、目立った点をあげると、現実的タイプに属する人たちでは、熟練的職業にある父親が他よりやや多くみられるが、芸術的、社会的タイプは、逆に含まれていない。また、社会的タイプに属する人たちは、事務的職業にある父親が少ない。企業的タイプは、全体の人数が少ないが、管理的・定型専門的職業について、高級専門的職業が比較的多い。慣習的タイプの人たちは、準専門的

註6) 総合得点結果から得られた総合コードの第1位を用いるが、第1位が複数の場合、例えばR/Iであるとそのデータは分析対象から除いた。なお、総合コードの求め方は、拙稿1980aを参照。

な事務的職業にある父親が比較的多い。

母親の就労状況では、研究的タイプが未就労の親が多いのに対して、企業的タイプは、逆に有職者が最も多い。また、有職者は、社会的、慣習的タイプにおいても比較的多くみられる。

個人的属性のうち、進路の決定時期は、現実的、研究的タイプの人たちでは中学校及びそれ以前と高校時代が圧倒的に多く、これに対して、大学入学以後としているのは、企業的、慣習的タイプの人たちで、これは極めて顕著である。社会的タイプでは、大学入学以後とするのが45%弱と比較的割合が高いが、中学校及びそれ以前も12%程度を示している。

家庭の経済的状況については、現実的タイプが自宅通学可能であるという中間の階層が多いのに対して、社会的、企業的タイプは、上層階級の家庭が多い。芸術的タイプでは、低い階層にある家庭が33名のうち5名いる。

ついで内的要因の性格特性、適性能力について、Tab.8-a, bの通り分散分析を試みた。

性格特性では、熟慮的、活動的、支配的、社会的外向の4特性に差意が認められた。

熟慮的については、慣習的タイプが研究的、企業的、社会的、現実的の各タイプとの間に明確な差異がみられた。すなわち、慣習的タイプは、熟慮的傾向が強く、実行する前によく考えなおすという慎重なところがある。

活動的については、企業的タイプが研究的、慣習的、芸術的、現実的の各タイプとの間にそれぞれ差異が認められた。また、社会的タイプも研究的、慣習的、芸術的、現実的との間に差異が認められ、企業的タイプと社会的タイプが他領域より、より積極的に活動的な特徴をもちあわせている。

支配的については、社会的タイプが研究的、現実的、芸術的、慣習的の各タイプとの間にそれぞれ差異が認められ、また、企業的タイプも、研究的、現実的の両タイプとの間に差異が認められた。社会的、企業的タイプに属する人は支配性が大きい。

社会的外向については、社会的タイプが研究的、現実的、慣習的の各タイプとの間に明確な差異が認められた。また、企業的タイプ、芸術的タイプも、それぞれ研究的タイプとの間に有意な差異が認められた。特に、研究的タイプは、慣習的、現実的タイプとの間でも差異があることから、社会的外向性は社会的タイプにおいて最も強く、研究的タイプにおいて最も弱いとみることができる。対人接触要素を含む社交性を問題にしている社会的外向性は、本結果では社会的タイプと企業的タイプに著しく強くみられた。

上記以外の性格特性の結果をみると、秩序的、直観的特性が10%水準程度の有意な結果を示す。6領域のなかでは、慣習的タイプが最も秩序的であり、この反対は研究的タイプである。また直観的特性は企業的タイプにおいてその傾向が強いに対して、逆に現実的タイプでは弱い。さらに実際的特性は、企業的タイプにおいて強く、神経質は、芸術的タイプにおいて最も強い。

次に適性能力については、言語能力、書記的知覚、手腕・指先の器用さに差異が認められた。このうち、言語能力は、社会的、慣習的の両タイプが、現実的タイプとの間に有意な差異がみられた。すなわち、社会的、慣習的タイプの人たちは、現実的タイプより言語能力が得意であ

りすぐれている。

書記的知覚は、慣習的タイプが研究的、現実的タイプよりすぐれている。また、手腕・指先の器用さは、現実的タイプが社会的、慣習的、研究的の各タイプとの間でそれぞれ差異がみられ、現実的タイプに器用さが目立つ。

さらに、上記以外に数理能力、空間判断力、運動共応が、10%水準程度で有意である。数理能力は、研究的タイプと企業的タイプが能力的に高いグループに属する。空間判断力は、研究的タイプ、現実的タイプに特徴がみられる。運動共応は、企業的タイプと現実的タイプが、他の領域より比較的高い。

7つの適性能力のうち、形態知覚は各タイプとも平均値がほぼ同じで特徴はない。

次に、内的要因の一つである活動分野への興味、価値観をTab. 9に示す通り割合(%)を求め比較した。

興味について、6つのタイプはそれぞれ予想される活動分野にほぼうまくあてはまっている。例えば現実的タイプは、機械的・技術的な活動、研究タイプは、知的・研究的活動、慣習的タイプは、事務的・計算的な活動に強い特徴を示している。

社会的、企業的タイプは、人と接する活動以外に、知的活動(社会的)、人を管理・監督する活動や戸外でする活動(企業的)に特徴が見い出された。

また、価値観については、芸術的タイプが自己実現的価値を重視している割合が最も多く、次に現実的タイプと続くが、慣習的タイプは最も少ない。対人接触に関する価値は、社会的タイプに特徴がある。また安定に対する価値は、慣習的タイプが最も高く、研究的、企業的タイプも比較的高い。

Table 6-a

6領域にみられる対人影響要因の分散分析結果

領域 対人影響要因	現実的タイプ N = 97		研究的タイプ N = 46		芸術的タイプ N = 33		社会的タイプ N = 65		企業のタイプ N = 17		慣習的タイプ N = 28		F 値
	Mean	SD	Mean	SD	Mean	SD	Mean	SD	Mean	SD	Mean	SD	
父 親	2.27	0.81	2.26	0.77	2.12	0.82	1.98	0.82	2.12	0.99	1.96	0.79	1.407 3.313 P<.01 0.260 1.717 7.317 P<.001
母 親	2.70	0.58	2.72	0.46	2.42	0.75	2.40	0.66	2.47	0.72	2.36	0.78	
友 人	2.57	0.68	2.54	0.69	2.52	0.62	2.48	0.77	2.41	0.87	2.46	0.64	
そ の 他	2.66	0.66	2.52	0.81	2.36	0.86	2.37	0.78	2.59	0.71	2.36	0.83	
先 生	2.66	0.63	2.37	0.88	2.24	0.90	2.00	0.92	2.88	0.33	2.46	0.69	

Table 6-b

6領域にみられる親の養育態度の分散分析結果

領域 親の養育態度	現実的タイプ N = 97		研究的タイプ N = 46		芸術的タイプ N = 33		社会的タイプ N = 65		企業のタイプ N = 17		慣習的タイプ N = 28		F 値
	Mean	SD	Mean	SD	Mean	SD	Mean	SD	Mean	SD	Mean	SD	
統制的態度 父親	2.32	0.65	2.41	0.69	2.39	0.61	2.40	0.75	2.41	0.71	2.36	0.49	0.199 0.300 2.047 P<.10 1.702 1.559 1.111
“ 母親	1.90	0.64	1.87	0.69	1.94	0.66	1.91	0.74	1.82	0.64	2.04	0.69	
受容的態度 父親	1.77	0.65	1.67	0.60	1.73	0.67	1.49	0.62	1.59	0.80	1.86	0.59	
“ 母親	1.61	0.62	1.54	0.55	1.45	0.56	1.40	0.55	1.35	0.49	1.64	0.49	
男らしさへの待 父親	1.81	0.68	1.89	0.67	1.76	0.61	1.69	0.71	1.41	0.62	1.79	0.57	
“ 母親	1.93	0.68	2.04	0.73	1.88	0.55	1.80	0.77	1.65	0.79	1.89	0.57	

※ 対人影響要因の回答は、「影響を受けた方」を1点、「どちらともいえない」を2点、「影響を受けていない方」を3点に配点した。

また、親の養育態度は、「はいいつも」、「強く求めた」を1点、「はいときどき」、「やや求めた」を2点、「いいえ」「余り求めなかった」を3点とし平均値を求めた。

Table 7

職業選択要因(個人的属性と外的要因)にみられる6領域別の人数と割合

	出生順位		進路の決定時期			職業レベル(父親)				
	長男	非長男	中学・以前	高校時代	大学・以後	専門的(高級)	専門的(定型的)	事務的	熟練的	半熟練的
現実的タイプ	75(77.3)	22(22.7)	14(14.4)	61(62.9)	22(22.7)	10(10.3)	37(38.1)	23(23.8)	9(9.3)	18(18.5)
研究的タイプ	36(78.2)	10(21.7)	7(15.2)	26(56.5)	13(28.3)	2(4.3)	19(41.3)	12(26.1)	2(4.3)	11(24.0)
芸術的タイプ	22(66.7)	11(33.3)	1(3.0)	14(42.5)	18(54.5)	1(3.0)	12(36.4)	13(39.4)	-	7(21.2)
社会的タイプ	45(69.2)	20(30.8)	8(12.3)	28(43.1)	29(44.6)	8(12.3)	31(47.7)	11(16.9)	-	15(23.1)
企業的タイプ	13(76.5)	4(23.5)	1(5.9)	4(23.5)	12(70.6)	4(23.5)	8(47.1)	1(5.9)	1(5.9)	3(17.6)
慣習的タイプ	22(78.6)	6(21.4)	-	10(35.7)	18(64.3)	1(3.6)	6(21.4)	11(39.3)	2(7.1)	8(28.8)

	職業領域(父親)						母親の就労状況			家庭の経済状況		
	現実的	研究的	芸術的	社会的	企業的	慣習的	就労継続	経 験	未就労	下宿通学	自宅通学	通学困難
現実的タイプ	32(33.0)	4(4.1)	1(1.0)	2(2.1)	48(49.5)	10(10.3)	34(35.1)	37(38.1)	26(26.8)	27(27.8)	61(62.9)	9(9.3)
研究的タイプ	16(34.8)	2(4.3)	-	1(2.2)	18(39.1)	9(19.6)	15(32.6)	13(28.3)	18(39.1)	17(37.0)	24(52.1)	5(10.9)
芸術的タイプ	11(33.3)	2(6.1)	-	6(18.2)	10(30.3)	4(12.1)	8(24.2)	15(45.4)	10(30.3)	13(39.4)	15(45.4)	5(15.2)
社会的タイプ	18(27.7)	4(6.2)	1(1.5)	7(10.8)	29(44.8)	6(9.2)	26(40.0)	21(32.3)	18(27.7)	32(49.2)	31(47.7)	2(3.1)
企業的タイプ	5(29.4)	-	-	2(11.8)	9(52.9)	1(5.9)	8(47.1)	8(47.1)	1(5.9)	8(47.1)	9(52.9)	-
慣習的タイプ	11(39.2)	1(3.6)	-	1(3.6)	8(28.6)	7(25.0)	11(39.3)	9(32.1)	8(28.6)	10(35.7)	17(60.7)	1(3.6)

Table 9

職業選択要因(興味と価値観)にみられる6領域別の人数と割合

	活動分野に対する興味						価値観					
	機械	知的	芸術	対人	奉仕	管理	事務	安	定	対人	地位	自己実現
現実的タイプ	59(60.8)	9(9.3)	6(6.2)	11(11.3)	5(5.2)	4(4.1)	-	3(3.1)	22(22.7)	5(5.2)	2(2.1)	68(70.0)
研究的タイプ	7(15.2)	4(8.7)	23(50.0)	7(15.2)	1(2.2)	-	1(2.2)	3(6.5)	14(30.4)	2(4.3)	1(2.2)	29(63.1)
芸術的タイプ	-	5(15.2)	5(15.2)	15(45.4)	3(9.1)	2(6.1)	-	3(9.1)	4(12.1)	3(9.1)	-	26(78.8)
社会的タイプ	3(4.6)	3(4.6)	12(18.5)	7(10.8)	18(27.7)	7(10.8)	7(10.8)	8(12.3)	14(21.5)	13(20.0)	-	38(58.5)
企業的タイプ	1(5.9)	2(11.8)	1(5.9)	1(5.9)	5(29.4)	1(5.9)	5(29.4)	1(5.9)	5(29.4)	1(5.9)	1(5.9)	10(58.8)
慣習的タイプ	1(3.6)	-	2(7.1)	3(10.7)	4(14.3)	-	1(3.6)	17(60.7)	10(35.7)	3(10.7)	-	15(53.6)

各タイプの対象者人数は、現実的N=97、研究的N=46、芸術的N=33、社会的N=65、企業的N=17、慣習的N=28である。

なお個人的属性の出生順位、外的要因の父親の職業領域は明確な特徴がないため分析から省いた。

Table 8-a

6領域にみられる性格特性の分散分析結果

領域 性格特性	現実的タイプ N = 97		研究的タイプ N = 46		芸術的タイプ N = 33		社会的タイプ N = 65		企業的タイプ N = 17		慣習的タイプ N = 28		F 値
	Mean	SD	Mean	SD	Mean	SD	Mean	SD	Mean	SD	Mean	SD	
実 際 的	1.55	0.61	1.57	0.67	1.61	0.61	1.54	0.66	1.29	0.47	1.46	0.64	0.685
熟 慮 的	1.54	0.68	1.65	0.82	1.39	0.61	1.62	0.80	1.65	0.79	1.11	0.32	2.789 P < .05
神 経 質	1.64	0.75	1.52	0.78	1.42	0.56	1.69	0.88	1.47	0.72	1.50	0.79	0.836
活 動 的	1.81	0.62	2.02	0.77	1.85	0.62	1.48	0.62	1.35	0.49	1.90	0.57	6.069 P < .001
支 配 的	2.25	0.58	2.28	0.69	2.18	0.64	1.71	0.68	1.82	0.73	2.14	0.52	7.610 P < .001
社 会 的 外 向	1.62	0.68	1.89	0.74	1.48	0.57	1.28	0.52	1.35	0.49	1.57	0.57	5.876 P < .001
秩 序 的	1.69	0.73	1.78	0.73	1.48	0.67	1.55	0.64	1.59	0.62	1.32	0.48	2.231 P < .10
直 観 的	1.91	0.71	1.78	0.70	1.85	0.62	1.85	0.75	1.35	0.49	1.86	0.76	1.866 P < .10

Table 8-b

6領域にみられる適性能力の分散分析結果

領域 適性能力	現実的タイプ N = 97		研究的タイプ N = 46		芸術的タイプ N = 33		社会的タイプ N = 65		企業的タイプ N = 17		慣習的タイプ N = 28		F 値
	Mean	SD	Mean	SD	Mean	SD	Mean	SD	Mean	SD	Mean	SD	
言 語 能 力	2.37	0.60	2.28	0.66	2.18	0.64	2.08	0.64	2.06	0.56	2.04	0.69	2.596 P < .05
数 理 能 力	2.27	0.55	2.00	0.60	2.36	0.55	2.18	0.66	2.00	0.79	2.14	0.65	2.115 P < .10
書 記 的 知 覚	2.08	0.70	2.11	0.71	2.06	0.66	1.98	0.65	1.82	0.53	1.64	0.56	2.464 P < .05
空 間 判 断 力	1.90	0.59	1.87	0.65	2.09	0.68	2.08	0.64	2.29	0.69	2.00	0.47	2.045 P < .10
形 態 知 覚	1.80	0.57	1.83	0.71	1.82	0.46	1.89	0.66	1.88	0.49	1.89	0.69	0.230
運 動 共 応	1.63	0.60	1.91	0.66	1.73	0.52	1.83	0.63	1.59	0.62	1.71	0.53	1.939 P < .10
手 腕 指 先 の 器 用 さ	1.58	0.63	1.83	0.74	1.76	0.56	2.02	0.72	1.76	0.66	1.96	0.58	3.988 P < .01

※ 性格特性の回答は「はい」を1点、「どちらでもない」を2点、「いいえ」を3点に配点した。また適性能力も「大変得意である」を1点、「まあまあである」を2点、「余り得意でない」を3点とし平均値を求めた。

以上のことをTab.10.11にまとめると、現実的タイプの人たちは、機械的・技術的活動分野に強い関心を持ち、手腕・指先の器用さ、空間判断力、運動共応といった適性能力にすぐれている。また、価値観は自己実現的価値をもっている。性格的側面の活動性と支配性は弱い。父親の職業レベルは、各レベルとも目立った偏りは少ないが、他と異なる点は、熟練の職業に属する層がやや多くみられることである。また、親の養育態度は、父親による受容的態度、男らしさへの期待が他より弱く、家庭での親による子どもへのかかわり方が比較的少ないものと考えられる。進路の決定時期は、高校時代及びそれ以前におかれており、比較的早い時期に方向が決まるようである。

研究的タイプの人たちは、知的・研究的活動に強い関心を示す。また、数理能力、空間判断力にすぐれ、性格特性は、支配性が弱く、社会的内向の傾向がみられる。外的要因については、対人影響は先生の要因が比較的強い。養育態度は、父親による男らしさの期待があまり強くない。また、社会階層面の親の職業レベルは、事務的、半熟練の職業が比較的多く、これには低いレベルにある父親が含まれている。また、母親の就労状況は、未就労のものが多く、父親をも含め考えると比較的上の層と下の層にあるものが研究的タイプを形づくる背景となっている。さらに、進路の決定時期は、現実的タイプと同様に比較的早い時期に決まっている。

芸術的タイプの人たちは、芸術的活動に強い関心を示す。また価値観は、80%近くが自己実現的価値に重みづけを行っている。性格特性はやや神経質などところがある。外的要因の対人影響は先生が強く、母親もやや強い。職業レベルでは、熟練の職業にある父親はこのタイプには含まれていない。

社会的タイプの人たちは、対人接触の活動や知的・研究的活動にも興味がある。また、適性能力は言語能力がすぐれている。価値観は、自己実現以外に、よい人間関係が得られる対人接触的価値に重みづけをしている。さらに性格特性は、活動性、支配性が大で社会的外向（社交性）が目立つ。社会的タイプに関連する対人影響要因は、先生と母親である。また、親の養育態度は両親による受容的態度が強く家庭のなかでの人間的接触が大であることを示している。職業レベルについては、熟練の職業にある父親はこのタイプには含まれていない。また、事務的職業の親も少ないことは注目される。進路の決定時期は、大学入学以後が約半数近くあるとともに、中学校及びそれ以前も12%あり、現実的、研究的タイプと同じように、一部は早い時期に進路を決めている。

企業的タイプの人たちは、人と接する活動、人を管理・監督する活動に強い関心を示す。また、数理能力、運動共応の各適性能力にすぐれている。性格特性は、活動性、支配性が大で社会的外向も目立ち、社会的タイプと同じように、外向的、積極的な面がある。また、粹にはまらないで、直接的、瞬間的にみる直観的などところと、抽象的より現実的、実際のな面がある。外的要因では、家庭の親の役割が極めて強い。すなわち、親による受容的態度、男らしさへの期待は強い。父親の職業レベルは、専門的職業（高級、定型的）にあるものが多く上層階層に位置する。経済的な家庭状況からも同じことが言える。また、進路の決定時期は、大学入学以後であり、比較的遅い。

慣習的タイプの人たちは、事務的・計算的活動に強い関心を示す。適性能力のうち、言語的能力と書記的知覚は高くすぐれている。また、性格特性では、熟慮的（慎重）であり秩序的な傾向がみられる。価値観は、会社、仕事安定しているなどの安定の価値が、他のタイプよりやや多い。このような特徴をもつ慣習的タイプは、母親の要因による影響を受けている。しかし養育態度の受容的態度は弱い。職業的レベルでは、事務的、半熟練的職業の親が多い。また個人的属性としての進路の決定時期は、企業的タイプと同じように65%の人が大学入学以後においている。

以上、各タイプの特徴を内的要因、外的要因の両面からみたが、内的要因はもちろんのこと、外的要因でも各タイプは違った特徴を有していることが明らかにされた。

対人影響要因のうち父親の影響は大であり、企業的タイプは42%のものが受けており、また先生や母親からの影響も認められた。さらに、親の養育態度の受容的態度が、社会的、企業的タイプに多いことは興味のある結果である。

また、父親の職業レベル、母親の就労状況、家庭の経済的状況などの社会階層的側面も、タイプにより異なった特徴を示していることが、本分析から明らかになった。

Table 10
6 領域別内的要因の特徴について

	性格特性	適性能力	活動分野に対する興味	価値観
現実的	活動性小 支配性小	手腕・指先の器用さ 空間判断力 運動共応	機械的・技術的活動	自己実現的価値 70% 安定の価値
研究的	活動性小 支配性小 社会的内向	数理能力 空間判断力	知的・研究的活動	自己実現的価値 60% 安定の価値 30%
芸術的	(神経質)		芸術的活動	自己実現的価値 80%
社会的	活動性大 支配性大 社会的外向	言語能力	対人接觸の活動 知的・研究的活動	自己実現的価値 60% 対人接觸の価値 20%
企業的	活動性大 支配性大 社会的外向 (直観的 實際的)	数理能力 運動共応	対人接觸の活動 管理・監督的活動	自己実現的価値 60% 安定の価値 30%
慣習的	熟慮的 秩序的	言語能力 書記的知覚	事務的・計算的活動	自己実現的価値 50% 安定の価値 35%

Table 11

6 領域別外的要因及び個人的属性の特徴について

	対人影響要因	親の養育態度	父親の職業レベル	母親の就労状況	家庭の経済的状況	進路の決定時期
現 実 的			熟練の職業も含まれる		上の層が少ない約30% 中間層が圧倒的	中学校及びそれ以前 高校時代
研 究 的	先生 - 26.1%		専門的(定型的)約40% 事務的、半熟練の職業も比較的多い	未就労のものが多い		"
芸 術 的	先生 - 30.3% 母親 - 15.2%		専門的(定型的)事務的職業が多い 熟練の職業なし	有職者がやや少ない	低い層がややある 15%	
社 会 的	先生 - 41.5% 母親 - 9.2%	父親による受容的態度 56.9% (母親 " 63.1%)	専門的(定型的)約60% 事務的職業が少なく 熟練の職業なし	有職者が比較的多い	下宿通学可能の上の層が約50%	大学入学以後 45% 中学校及びそれ以前 12%
企 業 的	(母親 - 11.8%)	{ 父親による受容的態度 58.8% (母親 " 64.7%) (父親による男らしさへの期待64.7%)	専門的(定型的)職業 専門的(高級)職業	有職者が多い	"	大学入学以後
慣 習 的	母親 - 14.3%	(母親 " 52.9%)	事務的、半熟練の職業が多い	有職者が比較的多い		"

() は分散分析結果で明確にでないものを示す。また父親による対人影響の要因は全般に影響が大である。親の養育態度は3側面とも大きな違いは少ない。

Ⅳ 要 約

本論文の目的は、大学生男子を対象に次の2点を明らかにすることである。

- 1 ホランド理論の再吟味について。
- 2 職業選択要因の分析について。

特に1の中心課題である6領域の設定と内部構造の問題は、これまでのところホランド自身やその関連論文において、十分に明らかにされていない。このため、この理論をわが国でさらに強化・発展させることをねらいとしてまず理論の再吟味を試みた。2については、内的要因を中心としたこれまでの見方に外的要因をも考慮に入れた総合的な視点からの職業選択要因の分析を試みようとしたものである。

そこで、問題Ⅰでは、6領域そのものの設定が果して成り立つかを明らかにするため、手続きとしてガットマンらのSmallest Space Analysisによる職業興味構造の問題を取り上げた。あわせて、SDSの内部関連性について、尺度(領域)間同士のまとまりがどうか、並びに座標上の位置関係がどのようなものであるかをみた。

これらの手続きを経た結果、6領域そのものの設定が可能であることが明らかになった。また、R-I-A-S-E-C-Rの順からなる6角形モデルが存在することも確認された。しかし、職業興味の6角形の形状については、領域が比較的近い距離に位置するものとそうでない領域があり、各領域に幅があることが認められた。この点から、6角形はやや変形した形状を示すものと考えられる。

以上、職業興味とSDSの内部関連性の両結果を全般的にみると、6領域の存在が確認され、また6角形の相互の位置関係も明らかにされたことから、ホランド理論は十分に意味のある支持できる理論であることが認められた。

次の問題Ⅱでは、外的要因をも含めた職業選択要因における6領域の全般的な特徴をまず求めた。(問題Ⅱ-a)

その結果、職業選択にかかわる内的・外的要因のタイプ別特徴が見い出された。すなわち、現実的タイプの人たちは、機械に関する活動に興味を示し、手腕・指先の器用さ、空間判断力、運動共応の各適性能力にすぐれていた。また性格の側面は、活動性弱く、支配性も弱い、子どもの頃の父親の養育態度を考えると、家庭での親による子どもへのかわり方が比較的少なかったとみることができる。進路の決定時期は、高校時代及び中学校というように早い時期に方向が決定する。

研究的タイプの人たちは、知的、研究的活動に興味があり、数理能力と空間判断力に高い能力を示した。性格特性は、現実的タイプと同じように活動性、支配性が弱い。また社会的内向の傾向がみられた。外的要因のうち先生の影響は比較的強く、父親の職業レベルは、一部低いレベルにある父親が含まれている。また進路の選択は、高校及びそれ以前の比較的早い時期に決定される。

芸術的タイプの人たちは、芸術的活動に強い関心を示した。価値観は自己実現的価値が80

％近くを占めており、性格的側面はやや神経質なところがある。また、対人影響の要因は、先生や母親からの影響が強くみられた。

社会的タイプの人たちは、対人接触的活動に興味を示した。適性能力では、言語能力がすぐれており、価値観は自己実現以外に対人接触的価値を重視していることが明らかになった。性格特性は活動性と支配性が大であり、また社会的外向も目立っている。対人影響要因は、先生と母親が強く、親の養育態度も受容的態度が大であることから、これらの要因が積極的に社会的タイプを形づくると言える。さらに、職業レベルでは、事務的職業にある父親が少ない。このタイプの人たちの進路の選択は、大学入学以後が半数近くあるのに対して、中学校及びそれ以前も僅かではあるがみられた。

企業的タイプの人たちは、対人接触的活動や人を管理・監督する活動に興味を示した。適性能力は、数理能力、運動共応にすぐれ、また、性格特性は、活動性、支配性が大で社会的外向が目立つ。直観的、実際のところがあることが見い出された。

外的要因では、管理的職業についている父親が多く、一部自営業をも含む職業の継承を親が求めていることから親の役割が強い。また、経済的な家庭環境も上の階層に位置している。進路の選択は、大学入学以後で比較的遅い時期に決定される。

慣習的タイプの人たちは、事務的・計算的活動に興味があり、言語能力と書記的知覚に高い能力を示した。性格特性は、熟慮的で秩序的な傾向がある。また価値観は、安定の価値がやや多くみられた。対人影響の要因では、母親がやや影響力をもつが、受容的態度が弱いことから家庭での子どもの頃の働きかけは比較的少なかったとみることができる。職業レベルも事務的半熟練的職業の親が多い。また、進路の選択決定の時期は、大学以後が65％を占め遅い。

以上、現実的から慣習的に及ぶ各タイプは内的要因及び外的要因においてもそれぞれ特徴を異にしていることが認められた。

文 献

- Blau, P.M., Gustad, J.W., Jessor, R., Parnes, H.S., & Wilcock, R.C. 1956
"Occupational choide: a conceptual framework" *Industrial and Labor Relations Review*,
9, 531-543.
- Cole, N.S., & Hanson, G.R. "An analysis of the structure of vocational interests"
J. Counsel. Psychol., 18, 478-486
- Crites, J.O. 1962 "Parental identification in relation to vocational interest development"
J. Educational Psychol., 53, 262-270.
- Crites, J.O. 1969 *Vocational Psychology : the study of vocational behavior and development*;
McGraw-Hill
- Guilford, J.P., Christensen, P.R., Bond, N.A., Jr., & Sutton, M.A. 1954
"A factor analysis of human interests" *Psychol. Monographs* 68. (4, Whole No. 375)
- Guttman, L. 1968 "A general nonmetric technique for finding the smallest coordinate space for
a configuration of points" *Psychometrika*, 33, 469-506.
- Guttman, L., & Schlesinger, I.M. 1969 "Smallest space analysis of intelligence and achievement
tests" *Psychological Bulletin*, 71, 95-100.
- 林知己夫・鮑戸弘 1977 "多次元尺度解析法"
サイエンス社
- Holland, J.L. 1970 *The Self Directed Search* ; Palo Alto, Calif., Consulting Psychologists Press
- Holland, J.L. 1972 *Professional Manual for the Self Directed Search* ; Palo Alto, Calif., Consult-
ing Psychologists Press.
- Holland, J.L. 1973 *Making Vocational Choices : a theory of careers* ; Prentice-Hall
- 伊藤裕子 1978 "性役割の評価に関する研究"〔教育心理学研究, 26, 1-11〕

伊藤裕子 1980 “女子青年の性役割観と父母の養育態度—大学生の職経歴選択を中心に—”〔教育心理学研究, 28, 67-71〕

Jenson, P.G. & Kirchner, W.K. 1955 “A national answer to the question, “Do sons follow their fathers' occupations?”” J. Appl. Psychol., 39, 419-421.

Kojima, H. 1975 “Inter-battery factor analysis of parents' and children's reports of parental behavior” Japanese Psychological Research, 17, 33-48.

雇用職業総合研究所編 1972 “職業レディネス・テスト手引”
〔雇用問題研究会〕

Kuder, G.F. 1946 Manual to the Kuder Preference Record. Chicago : Science Research Associates.

Kuder, G.F. 1966 Kuder Occupational Interest Survey general manual. Chicago : Science Research Associates

森下高治 1980 a “青年の職業行動に関する研究”〔相愛女子大学研究論集 第27巻, 相愛女子大学・短期大学研究論集 編集委員会〕

森下高治 1981 a “職業行動に関する—考察—ホランド理論とSDS調査票について—”
〔相愛女子大学研究論集 第28巻, 相愛女子大学・短期大学研究論集 編集委員会〕

森下高治 1981 b “職業行動に関する研究—志望職業による分析を中心として—”
〔武田正信教授退職記念事業委員会〕

三浦武・島田俊秀 1970 “父—母—子関係の分析—P. C. R. T. と子どもの性格の関係—”〔日本心理学会第34回大会発表論文集, 363〕

- 三浦武・森重敏・島田俊秀 1971 “父-母-子関係の分析(17) - P. C. R. T. と子どもの性格との関係(2)”〔日本心理学会第35回大会発表論文集, 393-396〕
- Nie, N.H., Hull, C.H., Jenkins, J.G., Steinbrenner, K., & Benet, D.H. 1975 *Statistical Package for the Social Science*; 2nd ed., McGraw-Hill
- 日本職業指導協会編 1969 “職業指導研究セミナー報告書-1969”
- 小川一夫・田中宏二 1979 “父親の職業が息子の職業選択に及ぼす影響に関する研究”〔教育心理学研究, 27, 272-281〕
- 小川一夫・田中宏二 1980 “親の職業が娘の職業選択に及ぼす影響に関する研究”〔教育心理学研究, 28, 328-331〕
- Roe, A. 1956 *The Psychology of Occupations*; Wiley
- Roe, A. 1957 “Early determinants of vocational choice” *J. Counsel. Psychol.*, 4, 212-217.
- 労働省編 1969 “一般職業適性検査手引”〔雇用問題研究会〕
- Strong, E. K., Jr. 1943 *Vocational Interests of Men and Women*; Stanford Univ.
- Strong, E.K., Jr. 1964 *Vocational Interests of Men and Women*; 5th ed. Stanford Univ.
- Super, D.E. 1957 *The Psychology of Careers*; Harper and Brothers
〔日本職業指導学会訳「職業生活の心理学」誠信書房 1967〕
- Super, D.E. 1969 *The Work Values Inventory*; Houghton Mifflin
- Super, D.E., & Crites, J.O. 1962 *Appraising Vocational fitness*; Harper & Row
- Super, D.E., & Bohn, M.J. 1971 *Occupational Psychology*; Tavistock

武田正信・森下高治 1980b "専攻課程別職業行動の比較研究"〔関西学院創立90周年文学部記念論文集, 関西学院大学文学部〕

辻岡美延・山本吉廣 1975 "確認的因子分析における検査尺度構成"〔関西大学社会学部紀要, 6(1), 53-66〕

Weinstein, M.S. 1953 "Personality and vocational choice" Unpublished doctoral dissertation, Western Reserve Univ.

Werts, C.E. 1968 "Parental influence on career choice" J. Counsel. Psychol., 15, 48-52.

本論文は1981年に関西学院大学に提出した博士学位論文の一部である。上記の論文を作成するにあたり有益なご指導をいただいた関西学院大学名誉教授武田正信先生に衷心より感謝の意を表します。